



CONTENTS

- ◆水が育む芸術 小原和紙
- ◆クズ～実は有用な厄介者
- ◆小さな努力を積み上げて矢作川に清流を取り戻そう
- ◆今月の調査風景
- ◆今月の一枚
- ◆編集後記

9

2004 September
No.77URL <http://www.hm.aitai.ne.jp/~yahagi/>

水が育む芸術 小原和紙

富樫 朗

和紙を漉くときに欠くことのできないものがあります。それは水にほかなりません。和紙は、植物繊維から水を媒体として作る優れた自然素材です。繊維同士が水の表面張力により引き寄せられ、結合して紙となります。ですから、水の良し悪しが直接紙の品質に関わってきます。寒漉き（冬に漉く）の和紙が良質なのは、冷たい水の方が表面張力も強く不純物も少ないからです。小原村には紙漉に適した良質の水があり、これが今日まで発展した和紙工芸のベースに流れています。



スプーンにより絵を描く

小原村は、和紙原料のコウゾの育成に適した気候風土で、小原村史によると、室町時代の明応5年（1496年）に隣の東萩平村（現東加茂郡旭町大字東萩平）に三玄寺を建立する際、相庭という僧侶が貧しい村の副業として紙漉を教えたとあります。

昭和7年（1932年）に工芸家藤井達吉と小原村との深い関係が始まり、美術工芸品として付加価値の高い和紙を漉くようになりました。昭和20年（1945年）には藤井が小原村に疎開し、若者を中心多く村民に美術工芸の大切さを教えました。藤井のもとに通う若者達は、「自分のためではな

く、子孫のために小原文化を発展させなければならない。」という藤井の言葉を信じ、写生を日課とし、日展を始めとする展覧会に入選するなどして、大変な苦労を重ね小原工芸和紙の礎を築きました。

現在小原村では、額絵、襖、屏風、色紙、団扇、灯りなどが制作されています。コウゾの纖維を染めてトロというトロロアオイから抽出した粘液の入った水（トロ水）に分散させ、さまざまな道具や技法を使い簞の上に流し込むことで、紙を漉く段階で絵模様を描きます。



小川喜数作「樹神」

スプーンによって簞に流されたトロ水は、ゆっくりと簞の上に広がり纖維同志を絡ませていきます。やがて水は漉され美しい纖維が風景などを描きます。制作の大きなポイントは、原料の濃度やトロ水の使い方です。作家はトロ水の使い方を工夫し、独自の表現を追い求めています。このようにして制作される作品は、和紙特有の温かみある美しさを持ち私たちの心を豊かにしてくれます。

(とがし ろう、

和紙のふるさと和紙展示館 学芸員)



和紙工芸館での紙漉体験

小さな努力を積み上げて 矢作川に清流を取り戻そう

裕 伸夫

矢作川流域の森林の大部分を占める放置されたスギやヒノキの人工林は、遠くから見ると一見、緑に覆われた自然豊かな森林に見えるが、実際、森林に入ってみると、木が密集していて太陽の光が地表にまで届かず、暗くて草も雑木も生えない砂漠のような山肌をさらけだしている。山は保水力を失って、少しの雨でも急激に水と土砂が湖に流れ込んでしまい、逆に雨の降らないときには山に保水力がないため、山から湖への新鮮な水の供給は極端に減ってしまうと言わされている。山に降った雨はすぐにダム湖に流れ込んで滞留し、その結果としてヘドロとなり、湖に堆積した土砂が汚染されていく。ダムの水は濁り、この水が放流によって下流に流れ、少しの雨でも川の水が濁ってアユなどの大切な食料となる藻を泥で覆ってしまうと考えられる。

一方、天然林や手入れの行き届いた林に囲まれた湖では、山の地表を覆い尽くす雑木や草が降った雨の水を蓄え、山全体が「緑のダム」となるため、雨が降らないときにも新鮮な水を湖に供給し続けることができる。また雨の時には、草や雑木の根が土砂の流出を食い止める。



管理されていないヒノキ林
(旭町: 洲崎 燐子撮影)



管理されているスギ林
(旭町: 洲崎 燐子撮影)



土砂崩れが発生した人工林 (旭町: 芝村 龍太 氏撮影)

このような、砂漠に似た放置林の地表に、草や雑木の緑を取り戻し、「緑のダム」を再生すれば、ダム湖には常時新鮮な水が供給できるだろうし、山には色々な虫や動物も帰ってくるだろう。そのためには、密集して生えているスギやヒノキの人工林を間引いて、地表に太陽の光が入るようにしなければならない。これが木の間引き、すなわち、間伐である。

私の計算では、これらの森を10年計画で再生し、矢作川水系に健全な森林を取り戻すためには、毎年、現在の3倍の量の間伐をし、尚且つ、これらの間伐材を山に放置せずに有効利用するためには、現在の7倍の需要拡大をしていかなければならないことになる。

幸いにして、最近、徐々に一般市民にも「緑のダム」への意識が芽生えつつあり、森林ボランティア活動も活発になってきた。

私も今年2月に開催された「とよたオイスカ森林塾」に入って勉強をし、同期生の有志で結成した森林ボランティア「小原こだまの会」の一員となった。7月から矢作川沿いの小原村の山で活動をはじめた。この会は会員および地元の人たちとの心のふれあいを大切にして、会員夫々の精神面の支えとなることを目指している。また、この地区の中心にある蚕靈山の宮司さんに会の顧問になっていただき、村の秋祭りにも参加して、村の人たちと心を通じ合わせて森の整備を進めようと楽しみにしている。これからも同じ志を持った仲間が増えることを期待している。

私達の活動は取るに足りない一滴の雨水に過ぎないかも知れないが、一滴一滴の雨水が集まって川となっていくように、矢作川を愛する多くの人のひとつの努力が、矢作川に清い流れを取り戻すもの信じている。

(はざま のぶお、
森林ボランティア 「小原こだまの会」会員)

クズ～実は**有用**な厄介者

洲崎 燐子

クズは日本中の至る所で見ることのできる、マメ科の多年生つる植物です。河川敷で、あるいは林の伐採跡地で、他の植物を覆って盛大に繁茂し、駆除に手を焼く厄介者です。矢作川水系でも本流・支流のあちこちではびこっています。



堤防法面に生い茂るクズ

クズが嫌われる理由の一つは、その成長の速さでしょう。矢作川が豊田市の都市域を流れるゾーンで河川敷の植物調査をしていたとき、4月にはノイバラに覆われていた場所が、10月には一面のクズ草原になっていて驚いたことがあります。私の大学院生時代の指導教官、早稲田大学の伊野良夫先生がクズの茎の成長を追跡したところ初夏には1日30cm、1シーズンでは30mも伸びるものがあったそうです。1ヵ所の大きな根から出た茎の合計の長さが1.5km近くになったケースもあったというから驚きです。

このような成長の速さは、クズが春から夏に光合成によって蓄えた栄養分を、地下の根に大量に蓄えるという特性に支えられています。このことと、地表面が暗くなると種子が発芽しにくくなることから、クズは有性繁殖（種子による繁殖）ではなく、主として無性繁殖（根を発生させての繁殖）によって拡大しています。この特徴を逆手にとり、秋に葉が枯れはじめたころ、茎を一部切断し、そこから灯油を吸い込ませて枯らせるという駆除方法があります。

嫌われ者のクズですが、日本人の暮らしの中ではきわめて重要な位置を占める植物でもありました。根は薬局方（主要な医薬品の品質・純度・強度の基準を定めた法令）にも収められている風邪薬の葛根湯や、良質のデンプンが含まれる葛粉（奈良の吉野葛がとくに有名）の原料となります。

また、つるはそのまま編んで籠などの容器とした他に、纖維をとって織り上げ、葛布を作りました。これは衣料の他にふすま紙としても用いられたそうです。葉も栄養価が高く、家畜の餌として適していましたが、若芽や葉は天ぷらにして人が食べることもできます。秋には甘く香る赤紫色の美しい花をつけるため、秋の七草の一つでもあります。この花は酢の物などにして食べられるだけでなく、干して煎じると二日酛に効くそうです。これだけ至る部分が利用できる植物は珍しいのではないでしょうか。

思えばクズだけではなく、いま矢作川中流域のあちこちで河川敷を覆っているマダケやオギ、ススキなども、数十年前まではさまざまな用途に用いられていた有用植物でした。これらの植物の広がりには、河道の固定化といった環境要因ももちろんあるでしょうが、身近な植物を生活の中で利用することがなくなったライフスタイルの変化も影響しているのでしょう。人はクズに「昔はみんなに重宝したくせに、今は厄介者扱いして…」と言われても仕方ないのかもしれませんね。

(すぎき とうこ、

豊田市矢作川研究所 主任研究員)



クズの花（吉鶴 靖則撮影）

今月の 調査風景

7月16日（金）

アユの成長および分布を調査するため、2週間に一度の間隔で行われている友釣り調査を取材してきました。撮影をはじめてほどなく、カメラのファインダー越しに見る釣人に、絵になる人とならない人がいることに気がつきました。ベテラン釣師ほど動作が流れるように美しいことに感動した次第です。（吉鶴）



7月21日（水）

カワシオグサの発生状況を矢作川と近傍河川で比較する調査を数年継続しています。木曽川の美濃太田から川島町までの区間で調査をしました。カワシオグサは愛岐大橋から川島町あたりで確認されました。このあたりの水質（電気伝導度を指標）の値は、矢作川中流域の3倍高い高さで、水質の汚濁が確認されました。なんといっても、その証拠に淡水海綿が河床を覆い尽くし、耐え難い臭いを放っていました。（内田）



8月3日（火）～4日（水）

愛知県内に2つの研究林と2つの試験地を擁する東京大学愛

知演習林との合同セミナーを行いました。滋賀県立大学の鎌内宏光氏に世話人となって頂き、1日目の午後は愛知演習林の蔵治光一郎講師および洲崎・高橋研究員により互いの施設や研究内容についての紹介が行われました。その後、愛知演習林内を見学したのですが、1930年から水文観測データが蓄積されている量水堰堤や風化花崗岩のため全く植生の無い尾根筋が続く林など、とても興味深い場所でした。2日目は矢作川を上流から河口まで視察しました。

（白金）



今月の一枚

風にそよぐ風鈴—ツリガネニンジン
(二〇〇三年九月二十三日 豊田市松平町 吉鶴靖則撮影)



編集後記

今年は異常な猛暑が続き、大変過ごしづらい夏でした。その中、矢作川学校が流域のあちらこちらで開かれ、川に対する関心の高さをひしひしと感じました。ただ、多くの小・中学校ではその時、もしくはその1年のみの川とのつながりだけのようで、継続的に川と関わっていくような取り組みをしている学校が少ないので大変残念です。

（白）

豊田市矢作川研究所

〒471-0025
愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F
TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028
E-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

Rioは再生紙(100%)を使用しています。